

親の介護経験からみたインフォーマル関係の特質

佐藤 友香

(北星学園大学大学院)

杉岡 直人

(北星学園大学)

Caring Experiences for the Elderly and Informal Relations

Yuka Sato

Naoto Sugioka

In this study, an explanation variable is composed of experiences for the elderly which has a couple of categories: those who had cared for any one of their own father, mother, father-in-law, or mother-in-law and those who haven't. How experiences of caring for parents or parents-in-law affect their opinions such as about their family are examined. Results shows that persons who are self-employed, live in their own house are likely to be careres. Also, such people tend to think neighbors or someone in community as a reliable person when they need care for themselves.

key words : informal careres, informal network, caring relations, role expectation

1. 目的と方法

本研究では、家族（親への）介護態度の相違によってインフォーマルな関係資源に対する意識がどのように異なるのかに着目した。家族介護は、世帯構造や地域社会の社会文化規範あるいは個人の生活史から形成されたき価値観によって左右され、かつ介護される世代と介護する世代とのダイナミクスによって、介護形態/内容が選択され、あるいは決定されていく。これまで介護経験に基準をおいて分析されることが多かったといえるが、介護という関わりは当事者にとって（契約による介護サービスの利用という性格をもつものではなく）介護者・要介護者双方の生活経験や共有する価値との葛藤と対立の中で、交錯する社会的相互作用の結果として表出するものである以上、あくまで変化する関係の一時点での関係水準をとらえているにすぎない。むしろ同居・非同居を規定するファクターや老親子関係のリアルな側面は、お互いの役割期待を受け入れる要素が社会的要因によって、

なると考えられる。したがって、ここでは、介護に（結果として）積極的に関わったと意識しているグループと実際にあまり関わらなかったと受けとめているグループとの違いがインフォーマルな関係の形成・維持に対していかなるオリエンテーションを与えているのかをとりあげる。

ここでの介護関与グループの分類手続きは、「高齢者用調査票」の問 32-35 での「親の介護」についての質問の対象者である 58-77 歳（1920 年代および 1930 年代生まれ）を「介護経験あり」と「介護経験なし」に分け、介護経験の有無と家族に関する意識や学歴などとの関係を見る。ここでいう、「介護経験あり」とは、対象者の実父、実母、義父、義母のいずれか人が亡くなるまでの間に、介護や看病を必要とした期間があり、その介護や看病に関して、「中心となって介護・看病にあたった」もしくは、「中心ではないがかなりかかわった」人のことであり、それ以外の対象者を「介護経験なし」（グループ）とした。介護経験に関する設問には、選択肢のうち「少しだけかかわっている」もあるが、「中心となって介護・看病にあたった」人および「中心ではないがかなりかかわった」の方が介護・看病に関してより積極的にかかわったと見なし、この二つを選択したもののみを、便宜的に「介護経験あり」（グループ）とした。

2. 介護経験と続柄・属性

実父の介護経験者は、経験ありが、44%、経験なしが 56%であった。実母は、介護経験あり、51%、経験なしは、49%、そして、義父の場合はそれぞれ 63%、37%、義母は、48%、52%となっており、義父の介護の経験者が最も多くなっている。本文における「介護経験あり」、「介護経験なし」の対象者となる全体では、介護経験ありが、52%、「介護経験なし」は、48%である。

介護経験ありと介護経験なしの対象者を性別で見ると、男性の場合、介護経験ありが 43%、介護経験なしが、57%となっており、介護経験なしの人のほうが多い。一方、女性は、介護経験ありが 60%、介護経験なしが 40%と、女性の場合は、介護経験ありの人のほうが多い。これは、一般的に女性が介護に関わることが多いこと関係があると思われる。また調査において女性の介護へのかかわりが高いのは、父親の介護には、母親が中心となって関わる人が多いが、母親の介護の経験者には、女性が多く、また、義父母の介護に関わる女性が、男性に比べて極めて多いという第一次調査報告書の結果（大久保,2000）も男女の経験の差によるといえるだろう。

介護経験の有無について、対象者を「58-64 歳」、「65-69 歳」、「70-77 歳（70 歳以上）」にわけ、年齢別にみたものが、付表 2 である。58-64 歳では、介護経験ありは、50%、介護経験なしは、50%であり、65-69 歳では、介護経験ありが 57%、介護経験なしが、43%、70 歳以上の人では、それぞれ 51%、49%であった。58-64 歳だけは、介護経験なしが介護経験

歳以上の人では、それぞれ 51%、49%であった。58-64 歳だけは、介護経験なしが介護経験ありを上回っていた。

対象者の学歴と介護経験の有無についての関係を見ると、介護経験ありでは、多い方から順に、「新制中学校、旧制小学校（尋常・高等科）・国民小学校・青年学校」が 46%、「新制高校、旧制中学校・高等女学校・実業学校・模範学校」の 38%の二つで 8 割を超えている。また、介護経験なしにおいても、「新制中学校、旧制小学校（尋常・高等科）・国民小学校・青年学校」が 50%、「新制高校、旧制中学校・高等女学校・実業学校・模範学校」が 33%と同様の結果であり、特に大きな差は見られなかった。つまり、本人の学歴と介護のかかわりには関係が見られない。この世代は、進学率も低く学歴と階層の相関は現代よりも強いとみなせるから、生活水準のような経済的階層指標では、差が見られないことから、むしろ他の生活意識/規範や社会関係変数を考慮する必要性を示唆している。

3. 介護経験と家事・育児

親の介護を経験したという過去の経験と、家事や育児へのかかわりという現在の経験とのかかわりをみると本人の食事の用意へのかかわりについては、介護経験ありが「ほぼ毎日」の 52%と最も多く、次が「ほとんど行わない」の 36%となっている。一方、介護経験なしの人では、「ほとんど行わない」が 48%と最も多く、ついで「ほぼ毎日」の 40%である。したがって、前者の方が家事・育児経験もやや多いといえるから自営業・専業主婦のような生活のかかわりが介護と結びつきやすい関係を作り出しているといえるであろう。（付表 5 参照）

洗濯へのかかわりの頻度については、介護経験ありの人では、「ほとんど行わない」が 38%、「ほぼ毎日」が 37%となっていた。介護経験なしでは、「ほとんど行わない」が 51%と 5 割を超えており、「ほぼ毎日」が 27%と続いている。

風呂そうじへのかかわりについては、介護経験ありの人で、「ほとんど行わない」34%、「ほぼ毎日」が 31%であった。介護経験なしでは、「ほとんど行わない」が 43%に続いて、「ほぼ毎日」が 24%である。

育児や孫・子供の世話についてみると、対象となる該当者がいない人が、介護経験のある人、介護経験のない人ともに約 57%であった。

家族や親族の看病・介護については、育児や孫・子供の世話と同様に、該当者がいない人が約 8 割となっている。全体として、介護経験と家事・育児のこれまでのかかわりは、時間のとれる自営業層のライフスタイルを想定できることから、家庭に滞在する時間の拡大が見込まれるこれからの世代にとって、介護は意外と深刻な選択肢となりやすい側面をみせているといえないだろうか。

4. 介護経験と家族についての意識

(1) 男性は外で働き、女性は家庭を守る

「男性は外で働き、女性は家庭を守る」という性別役割分業に関しては、介護経験ありという人達のうち、「そう思う」が 29%であるのに対し、介護経験なしでは、33%と介護経験のない人の割合が少し高くなっている。しかし、「そう思う」と「どちらかといえばそう思う」を合わせると、介護経験ありが 71%、介護経験なしでは、71%と双方ともに 7 割近くあり、大きな差はない。(付表 10 参照)

(2) 子供のためなら親は自分のことを犠牲にすべきだ

「子どものためなら親は自分のことを犠牲にすべきだ」ということに関しては、介護経験ありの人のうち「そう思う」と回答した割合は、18%、介護経験なしの人では、21%と介護経験なしの方が若干割合が高い。また、「そう思う」と「どちらかといえばそう思う」を合わせると、その割合はそれぞれ、65%と 60%と介護経験ありの賛成割合が高くなっている。

(3) 親の面倒をみるのは、長男の義務である

親の面倒をみるという介護とも関係する事柄と続き柄との関係に関する意識については、「そう思う」および「どちらかといえばそう思う」という肯定的な意見に介護経験ありの人達がより高い割合を示している。これは、長男が親の老後を見るべきであると考えた直系家族規範の内面化がより強い人達が介護に積極的に関わっていたと想定されるし、介護を経験したことによって長男としての役割を受け入れなければならないことという意味であろうか。この問題は、かつて直系家族意識について、直井道子が指摘（直井, 1986）した女性の同居を受け入れる意識が、直系家族のなかで生活することで形成されたのか、もともと同居を受け入れる女性が直系家族の中での生活を受け入れて結婚したのかの区別はデータ上、困難であるとしたことに関連している。

(4) 親が年をとって、自分たちだけでは暮らしていけなくなったら、子どもは親と同居すべきだ

老親と同居意識についても「親の面倒を見るのは、長男の義務」に同意していたのと同様に、介護経験がある人達のほうが、「そう思う」および「どちらかといえばそう思う」の両方とも介護経験のない人よりも高い割合を示している。

萩原清子（2000）は「同居家族・親せきに対する希望」では、『「具体的な援助よりも、介護者の精神的、肉体的な苦痛を理解してほしい」と答えたものが「妻」、「嫁」、「夫」に多く、逆に「介護者の精神的、肉体的負担に対して、介護を代わったり分担したりして、

にかかる経済的分担を他の兄弟や親せきもして欲しい」と答えた介護者は未婚の娘』ただ1人であった』ことを指摘し、『以上から、介護の精神的・肉体的苦痛に対して、具体的なことより“精神的理解”を求めているのは嫁であり、妻であった。「当然」のこととして介護しつつも、介護者1人に介護責任がかぶさっている現在、介護者の“社会的孤立”と“孤独感”に、まわりのものが無関心でいる様子がこの結果から伺える。他方、精神的に理解するより、具体的援助を求めているのは、嫁、娘、夫であり、現実的対応への希望も高くなっている』(萩原、143-5)という続柄にみる介護意識の相違・乖離について考察をしている。この点から、介護経験者は、介護者の社会的孤立や孤独感を理解できる立場にあるとも考えられ、将来の自分の介護にかかわる介護者への支援や理解、また周りの介護者へ援助できる立場としてコミュニティケアに関する支援者役割を果たせるといえるだろう。

介護の経験の有無と、「寝たきりなどで、介護を必要とするようになったとき」の援助や相談相手として、どのような人や機関を頼りにするか(複数回答)についての結果をみると、介護経験のある人と、ないグループの間に違いは見られず、自分の配偶者、子どもやその配偶者の二つが支持されていた。その次に続くものは、親・兄弟姉妹やその他の親族といった親族関係ではなく、専門家やサービス機関を頼りにするという回答であった。これは、自分の身近な家族員(配偶者や子ども)以外では、親族に頼ることは、すでに非現実的なものといえ、市場サービスや費用負担して利用する選択肢しかないという受けとめ方が、一般的になっていることの反映といえる。この意味で、介護の社会化は、避けられないものであり、日本における介護問題は一気に市場サービス利用システムへシフトする可能性があるといえる。まったくの他人である人達の方がより頼みやすい、または頼りになる存在であるということには普遍的な対人社会サービスの価値評価が存在するなのかもしれない。

5. 介護経験・態度からみたインフォーマル関係～数量化理論をもちいて

数量化理論を用い、介護経験の有無を基準変数として性別や意識などの各項目との関係について考察する。これは、最初にのべた介護態度の分類基準により、結果として介護に相当程度関わったと回答者が判断しているかどうか、関連する項目を変数コントロールした場合、どの変数によって左右されるのかをとらえようとしたものである。性、年齢、収入、住居形態、職業、家族意識、相談援助に関する意識によって構成したものを介護経験態度を基準として分散分析した結果をみると、以下のようにまとめられる。全体のF値は3.41であり、有意差は1%以下で有意となっている。

表1 介護経験の有無を基準とする関係変数の関連度（分散分析結果）

Source	DF	Type II SS	Mean Square	F Value	Pr > F
性別	1	6.20451912	6.20451912	26.04	0.0001
年齢（5歳区分）	4	2.64962863	0.66240716	2.78	0.0255
収入（本人）	9	0.82985715	0.09220635	0.39	0.9418
住居形態	5	1.52367189	0.30473438	1.28	0.2701
職業	6	3.32040007	0.55340001	2.32	0.0307
家族に対する意識 (子どものためなら親は自分のことを犠牲にすべきだ)	3	2.30138244	0.76712748	3.22	0.0219
家族に対する意識 (親の面倒をみるのは長男の義務である)	3	1.32995383	0.44331794	1.86	0.1342
家族に対する意識 (親が年をとって、自分たちだけでは暮らしていけなくなったら、子どもは親と同居すべきだ)	3	0.69002665	0.23000888	0.97	0.4081
援助や相談相手（介護必要時）1 (配偶者)	1	0.00621255	0.00621255	0.03	0.8717
援助や相談相手（介護必要時）1 (親・兄弟姉妹)	1	0.01996823	0.01996823	0.08	0.7722
援助や相談相手（介護必要時）1 (子ども・その配偶者)	1	2.37098005	2.37098005	9.95	0.0016
援助や相談相手（介護必要時）1 (その他の親族)	1	0.01872591	0.01872591	0.08	0.7792
援助や相談相手（介護必要時）1 (友人や職場の同僚)	1	0.00788794	0.00788794	0.03	0.8556
援助や相談相手（介護必要時）1 (近所（地域）の人)	1	1.40291557	1.40291557	5.89	0.0153

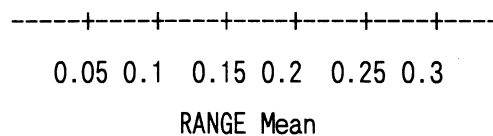
それぞれの説明力をF値によってとらえると、性別が26.04と最も高く、続いて、「寝たきりなどで、介護を必要とするようになったとき」に援助や相談相手として頼りにする相手としての、「子ども・その配偶者」(9.95) および「近所（地域）の人」(5.89)が続いていることが分かる。

しかし、変数をコントロールするとどうなるか。表2は、各項目と介護経験の有無とのかわりについては、経営者、自営業主といった職業が最も有意であることを指摘している。その他の上位のものは、介護が必要になったときに頼りにする相手としての、「近所（地域）の人」、持ち家（一戸建て、アパート）や賃貸住宅などの居住形態や性別という変数で

あった。一方、介護が必要になったときに頼りにする相手としての「その他の親族」、「友人や同僚」、「親・兄弟姉妹」、そして「配偶者」については、介護経験の有無では差がみられない。

表2 数量化理論Ⅱ類による介護経験の有無を説明する要因

ITEM	RANGE	Mean
職業	*****	0.341526
援助や相談相手 (近所(地域)の人)	*****	0.241594
住居形態	*****	0.204928
性別	*****	0.157957
年齢(5歳区分)	*****	0.130496
収入(本人)	*****	0.085482
家族に対する意識 (子どものためなら、親は自分のことを犠牲にすべきだ)	*****	0.083653
家族に対する意識 (親の面倒をみるのは、長男の義務である)	*****	0.075997
援助や相談相手 <介護必要時>(子ども・その配偶者)	*****	0.074454
家族に対する意識 (親が年をとって、自分たちでは暮らしていけなくなったら、子どもは親と同居すべきだ)	*****	0.056709
援助や相談相手 <介護必要時>(その他の親族)	**	0.020711
援助や相談相手 <介護必要時>(友人や職場の同僚)	**	0.020535
援助や相談相手 <介護必要時>(親・兄弟姉妹)	*	0.010593
援助や相談相手 <介護必要時>(配偶者)		0.003957



しかし、単に各変数間の説明力をみるだけでは、その内容は判断できない。あくまでも

職業であれば、どんな職業が介護経験ありのグループを特徴づけているのかが問題となる。表3は介護経験の有無（態度評価変数）を基準変数として、数量化理論II類を用いた時の各変数のカテゴリーウエイトを示したものである。マイナスが介護経験ありのグループの反応であり、プラスが介護経験なしのグループの平均値となっている。

説明力の大きい職業については、専門技術系の仕事と農林漁業職および技能労務作業系の職業が介護経験ありのグループを構成しており、販売/サービス系の職業についている場合は、介護経験はもつとも少ない傾向を示している。そして他のインフォーマルな人間関係よりも近隣に援助や相談相手がいると答えたグループが介護経験ありのグループを構成していることは注目されてよい。それだけ介護経験は、まわりの人間関係をうまくマネジメントできる環境や対人関係能力のある人でないと介護を引き受けたりしないものといえるのかもしれない。この点は、自宅が持ち家である場合に介護経験ありのグループを構成する傾向がみられるのと相即している。住宅に関しては、持ち家以外は介護経験ありの傾向はなく、ほぼ持ち家かどうかで介護するかどうかで規定されるといえる。

また、当然ではあるが、女性であること、年齢は60代後半までが介護経験ありのグループとなっている。収入については、年金生活のような水準のグループと600万円以上層で大別されるようであり、400万、500万くらいの中堅世代はまだ介護経験が少ないといえるのかもしれない。お金は重要であるが、むしろ時間や生活空間に余裕がないと困難であるといえるだろう。

最後に、介護経験を引き受ける条件をプロファイリングするなら、生活が自分でコントロールしやすい専門・技術職や自営業が中心で、持ち家を持ち、近隣関係をうまく形成している女性というイメージが浮かんでいる。仕事が忙しかったり、住宅事情が厳しく、収入も少ないことは大きなネックとなりやすい。収入については、幅があるが、高い収入をえている人々が介護経験があまりないように回答がでてるのは、専門機関や専門施設あるいはマンパワーを調達できるからであろう。袖井孝子(1995)は職業と介護の問題について、「自営業世帯と違って雇用者世帯では、職場と家庭が分離しているうえに、自らの裁量で労働時間を伸縮したり、仕事のペースを決めるわけにはゆかない。自営業世帯であれば、仕事の合間に家事育児あるいは介護に合わせて仕事のペースを決まることもできる。ところが雇用者世帯では、在宅勤務のような一部の例外はあるものの、概ね職業生活に家庭生活を適応させなければならない。」(袖井,15)として家族介護の構造的条件について解説しており、また、「有職介護者の特徴として、①男女共に経験年数を積んだ中堅労働者である、②介護の対象になるのは自分または配偶者の親が多い、③平均介護期間は約2年半だが疾病によってはかなり長期にわたる、④主たる介護者になるのは圧倒的に女性が多い、⑤男性の場合には、たとえ参加したとしても手伝い程度にとどまっているなどの特徴があげることができる。」(同,15)と指摘している。また、未盛(1998)は「欧米の先行研究から、男性の休業の利用は、本人の性別役割意識と家族関与、そして友人や両親や、配偶者、そ

して上司・同僚の支援が重要である。これに加え、男性の休業利用者数、配偶者の就業形態や休業期間などの多くの変数が関連することが示された。一方、国内の研究では、介護協力者の有無、家政婦などの福祉サービスの利用、介護対象、仕事の状況、職場の雰囲気に関連する」(55-6) ことを指摘している。今回の調査では、男性よりも女性が仕事に関しては影響を受けている。女性の半数近くは職業を持っていないとはいえ、男性は8割前後が同じように仕事を続けられている。よって、代替要員としての妻の役割が大きいことや上司・同僚の支援に関しては、自営業の場合は支援や理解を得られやすいといえるのではないか。

表3 介護経験・態度の規定要因：カテゴリーウエイト

ITEM	CATEGORY	Mean	カテゴリーウエイト SCORE
変数	変数値		
年齢 (5歳区分)			
	58-62歳	**	-0.016099
	63-67歳	**	0.019847
	68-72歳	*****	-0.051010
	73-77歳		-0.000571
	78歳—	*****	0.07948
性別			
	男	*****	0.075807
	女	*****	-0.082150
職業			
	経営者・役員	*****	-0.068492
	一般従業員	*	0.011019
	パート	*****	0.057274
	派遣社員	*****	0.154993
	自営業主	***	-0.029392
	家庭従業者	***	-0.029312
	内職	*****	-0.186533
収入 (本人)			
	収入なし	**	0.019546
	100万円未満		-0.000524
	100-129万円台	*****	-0.047882
	130-199万円台	*	-0.014463
	200-399万円台	*	0.006404

400-599 万円台		****	0.037600
600-799 万円台		**	-0.016952
1000-1199 万円台		***	-0.029578
1200 万円台		*	0.012254
住居形態			
一戸建て		*	-0.011719
マンション		****	0.037781
賃貸住宅		***	0.028587
賃貸アパート		*****	0.081714
給与住宅		*****	0.091552
その他		*****	0.193209
「子どものためなら、親は自分のことを犠牲にすべきだ」			
そう思う		*****	0.049272
どちらかといえばそう思う		***	-0.034381
どちらかといえばそう思わない		***	0.033154
そう思わない		**	-0.016575
「親の面倒をみるのは長男の義務である」			
そう思う			-0.000064
どちらかといえばそう思う		****	-0.036966
どちらかといえばそう思わない		****	0.039031
そう思わない		*	0.010113
「親が年をとって、自分たちでは暮らしていけなくなったら、子どもは親と同居すべきだ」			
そう思う		**	-0.020829
どちらかといえばそう思う		*	-0.012112
どちらかといえばそう思わない		**	0.021145
そう思わない		****	0.035880
「あなたが寝たきりなどで、介護を必要とするようになったとき頼りにする人」			
配偶者			
(いいえ)			-0.00217
(はい)			0.001786
親・兄弟姉妹			
(いいえ)			-0.001174
(はい)		*	0.009419
子ども・その配偶者			
(いいえ)		****	0.036375

(はい)		****	-0.038079
その他の親族			
(いいえ)			-0.000516
(はい)		**	0.020195
友人や職場の同僚			
(あてはまらない)			-0.000240
(あてはまる)		**	0.020295
近所(地域)の人			
(いいえ)			0.003685
(はい)		*****	-0.237909

-----+-----+-----+-----+-----

-0.2 -0.1 0 0.1

ここで取り上げた介護と扶養の問題は、国際的にみる家族間関係についての比較研究をもって家族規範や族モデルだけでなく社会保障制度のあり方に対する国民のオリエンテーションに連動するものであり、扶養に対する意識について清水浩昭(1992)が紹介するように、(アメリカ、イギリス、フランス、スウェーデン、中国、韓国、日本の青年についての比較)、日本とスウェーデンについて、日本:「積極的扶養型」25.4%「消極的扶養型」58.5%「自立型」9.8%であるのに対し、スウェーデンでは、それぞれ、17%、52%、28.5%となっていることとスウェーデンにおいて自立型が高いことを指摘(清水、24-5)している。

加えて国民意識として総理府広報室「長寿社会に関する世論調査」(1986)の<20-59>歳までの結果をみると、経済的援助について「本人と家族でその役割を果たすべきは80%以上」保健欲求:身辺介護について「家族とするものが70%を超えており、これは年齢別にみてもほぼ同じような傾向を示している。したがって、家族の介護意識としては、介護負担が発生したり、強化された場合に介護に伴う孤立やストレスが深刻化するが、多くの場合は、自分たち家族の問題を解決するという意識は、強いものがあるといえる。ただ、国際比較などを考える場合は、社会保障制度の利用者モデルがどのように設定されているのか、それはどのように解釈されるのかを検証しながら、決して固有性の論理に陥らず、あくまで家族と個人、社会と家族の位置についての的確に整理するなかで、まとめていくことが求められる。

付記 データ処理および介護問題についての現場での課題を中心に梶尚仁氏(札幌市社会福祉協議会)の協力を受けた。

付表1 介護経験の有無(実父)

	介護経験有	介護経験な	合計
実数	552	703	1255
パーセン	44	56	100

 $\chi^2=78.83, p<***$

介護経験の有無(実母)

	介護経験有	介護経験な	合計
実数	663	614	1247
パーセン	51	49	100

 $\chi^2=319.16, p<***$

介護経験の有無(義父)

	介護経験有	介護経験な	合計
実数	495	290	785
パーセン	63	37	100

 $\chi^2=410.41, p<***$

介護経験の有無(義母)

	介護経験有	介護経験な	合計
実数	454	485	939
パーセン	48	52	100

 $\chi^2=554.92, p<***$

介護経験の有無

	介護経験有	介護経験な	合計
実数	1201	1116	2317
パーセン	52	48	100

付表2 介護経験と年齢区分

年齢	介護経験有	介護経験な	合計
58-64	472	479	951
(パーセン)	50	50	100
65-69	307	232	539
(パーセン)	57	43	100
70歳以上	422	405	827
(パーセン)	51	49	100
合計	1201	1116	2317
(パーセン)	52	48	100

 $\chi^2=7.73, p<*$

付表3 介護経験と性別

性別	介護経験	介護経験	合計
男	474	622	1096
(パーセン)	43	57	100
女	727	494	1221
(パーセン)	60	40	100
合計	1201	1116	2317
(パーセン)	52	48	100

 $\chi^2=61.41, p<***$

付表4 介護経験と学歴

学歴	中学	高校	専門学校	短大	大学	その他	合計
介護経験	537	446	32	65	80	2	1162
(パーセン)	46	38	3	6	7	0	52
介護経験	544	363	21	51	101	5	1085
(パーセン)	50	33	2	5	9	0	48.3
合計	1081	809	53	116	181	7	2247
(パーセン)	48	36	2	5	8	0	100

 $\chi^2=14.07, p<*$

付表5 介護経験と家事や育児のかかわり:食事(本人)

頻度	ほぼ毎日	週に4-	週に2-3	週に1回	ほとんど	合計
介護経験	471	25	42	41	319	898
(パーセン)	52	3	5	5	36	51
介護経験	335	15	33	55	408	846
(パーセン)	40	2	4	7	48	49
合計	806	40	75	96	727	1744
(パーセン)	46	2	4	6	42	100

 $\chi^2=38.3, p<***$

付表6 介護経験と家事や育児のかかわり:洗濯(本人)

頻度	ほぼ毎日	週に4-5回	週に2-3	週に1回く	ほとんど	合計
介護経験有	328	91	96	40	334	889
(パーセント)	37	10	11	5	38	52
介護経験な	228	68	72	41	428	837
(パーセント)	27	8	9	5	51	48
合計	556	159	168	81	762	1726
(パーセント)	32	9	10	5	44	100

$\chi^2=35.12, p<***$

付表7 介護経験と家事や育児のかかわり:風呂そうじ(本人)

頻度	ほぼ毎日	週に4-5回	週に2-3	週に1回く	ほとんど	合計
介護経験有	275	86	110	126	304	901
(パーセント)	31	10	12	14	34	52
介護経験な	199	60	110	106	354	829
(パーセント)	24	7	13	13	43	48
合計	474	146	220	232	658	1730
(パーセント)	27	8	13	13	38	100

$\chi^2=19.54, p<**$

付表8 介護経験と家事や育児のかかわり:育児や孫・子どもの世話(本人)

頻度	ほぼ毎日	週に4-5回	週に2-3	週に1回く	ほとんど	該当者は	合計
介護経験有	84	27	36	50	172	501	870
(パーセント)	10	3	4	6	20	58	51
介護経験な	53	16	24	35	234	480	842
(パーセント)	6	2	3	4	28	57	49
合計	137	43	60	85	406	981	1712
(パーセント)	8	3	4	5	24	57	100

$\chi^2=27.08, p<***$

付表9 介護経験と家事や育児のかかわり:家族や親族の看病・介護(本人)

頻度	ほぼ毎日	週に4-5	週に2-3回	週に1回くら	ほとんど行わな	該当者は	合計
介護経験有り (パーセント)	55 6	6 1	5 1	22 3	100 12	679 78	867 51
介護経験なし (パーセント)	42 5	3 0	10 1	12 1	133 16	636 76	836 49
合計 (パーセント)	97 6	9 1	15 1	34 2	233 14	1315 77	1703 100

$\chi^2=15.08, p<*$

付表10 介護経験と家族についての意見:男性は外で働き、女性は家庭を守る

	そう思う	どちらかと	どちらかとい	そう思わない	合計
介護経験有り (パーセント)	345 29	493 42	154 13	181 15	1173 52
介護経験なし (パーセント)	363 33	410 38	143 13	176 16	1092 48
合計 (パーセント)	708 31	903 40	297 13	357 16	2265 100

$\chi^2=5.68$

付表11 介護経験と家族についての意見:子どものためなら親は自分のことを犠牲にすべきだ

	そう思う	どちらかと	どちらかとい	そう思わない	合計
介護経験有り (パーセント)	212 18	548 47	244 21	158 14	1162 52
介護経験なし (パーセント)	222 21	424 39	286 27	147 14	1079 48
合計 (パーセント)	434 19	972 43	530 24	305 14	2241 100

$\chi^2=16.72, p<***$

付表12 介護経験と家族についての意見:親の面倒は長男の義務

	そう思う	どちらかといえばそう思	どちらかといえばそう思わな	そう思わな	合計
介護経験有 (パーセント)	196 17	389 33	239 21	340 29	1164 52
介護経験な (パーセント)	164 15	312 29	258 24	346 32	1080 48
合計 (パーセント)	360 16	701 31	497 22	686 31	2244 100

$\chi^2=8.95, p<*$

付表13 介護経験と家族についての意見:親が年をとったら、親と同居すべきだ

	そう思う	どちらかといえばそう思	どちらかといえばそう思わな	そう思わな	合計
介護経験有 (パーセント)	318 27	483 41	187 16	197 17	1185 52
介護経験な (パーセント)	262 24	408 38	207 19	205 19	1082 48
合計 (パーセント)	580 26	891 39	394 17	402 18	2267 100

$\chi^2=8.23, p<*$

付表14 介護が必要になったときに頼りにする人

	配偶者	親・兄弟姉妹	子ども・その配偶者	その他の親	友人や職	近所(地)	専門家や	誰もいな	合計
介護経験有 (パーセント)	591 38	135 7	657 36	32 2	16 1	25 1	312 17	35 2	1803 53
介護経験な (パーセント)	623 40	115 7	487 31	27 2	10 0	8 0	254 16	45 3	1569 47
合計 (パーセント)	1214 36	250 7	1144 34	59 2	26 1	33 1	566 17	80 2	3372 100

参考・引用文献

- 大久保孝治(2000)「家族の看取りと介護」『家族生活についての全国調査』(NFR98) 日本
家族社会学会全国家族調査(NFR)研究会 No1 83-92.
- 直井道子(1986)「二世世代同居家族の主婦にみる権威主義的性格」『社会学評論』vol.37-2、
59-71
- 清水浩昭(1992)『高齢化社会と家族構造の地域性—人口変動と文化伝統をめぐって—』、
時潮社
- 萩原清子(2000)『在宅介護と高齢者福祉のゆくえ』、白桃書房
- 袖井孝子(1995)「介護休業制度の現状と課題」、『日本労働研究雑誌』、427、12-20
- 末盛慶(1998)「男性と介護休業—ヴィネット調査による利用要因の分析—」『季刊家計経
済研究』、vol.40 53-62

(2001年5月2日提出)

文部省科学研究費基盤研究 (A) : 10301010

家族生活についての全国調査 (NFR98) 報告書 No.2-6

現代家族におけるサポート関係と高齢者介護

Support Resources and Care for the Aged of the Contemporary Family

石原邦雄・大久保孝治 編

2001年9月

日本家族社会学会
全国家族調査 (NFR) 研究会